

〈論 文〉

分 業 再 論

篠 崎 恒 夫

1 はじめに

今日、スミスに指摘されたように、日常生活は分業システムに組み込まれていて、我々としてもそれが当然であるかのように受け止めていることは事実である。しかし、振り返ってみると我々の分業についての認識は案外浅薄で、観念的なものであるかもしれない。そこで、もう一度、分業論がたどった道を引き返して、文明としての分業の在り方を見直してみる必要があるのではなかろうか。そうした作業が、我々の分業像の厚みをいささかでも膨らますことになれば幸いである。

2 歴史としての分業

アダム・スミスが分業の利益を認めた分析は、分業認識の出発点であることは否定し得ないが、マルクスが『資本論』の既述の出発点に「商品」を据えたように、彼が『諸国民の富』著述の出発点に「分業」を位置づけるのは、その分析が時代的には産業革命黎明期であっても、分業それ自体が既に十分に成熟し、社会の富の増殖装置として社会の経済システムの根幹にまで発達していたからに他ならない。ただ、そこで考えなければならないことは、分業それ自体が、スミスの認識に登場する際、産業革命黎明期に急速に発展する経済史的素因を有していたものであったかどうかという点である。そうした疑問を解くために、スミスに先行する分業認識を確かめる

必要がある。

そこでまず、そうしたケースの所在を経営管理の発展史の中に求めてみよう。ジョージはその著『経営思想史』において経営管理実践が有史以来のものであると説くが、その中でベニスの造船所の艦船艤装がアッセンブリー・ラインを形成するものであると以下のように主張している。すなわち、「ベニスの海運力が増大するにつれ、市民達は貿易保護のために、武装した艦隊の必要性を感じた。・・・市は1436年に市営の造船所と軍需工場とを操業した。・・・16世紀にはベニスの国家と海軍力が全盛を極めた。戦争のために艦隊を建造し、さらに予備艦船をとって置くためには、大規模な生産様式が必要とされた。・・・予備艦船の艤装の時がくると、軍需工場は、現代の組立ラインに似たシステムを使った。倉庫は運河に沿って配置され、・・・ガリー船が備品のところに運ばれた。ガリー船が運河に沿って、倉庫を通過しながら引かれて行くと、兵器や備品が倉庫の窓から運び出された。・・・緊急な艤装をする場合は、軍需工場の職員は備品の形ごとに、特定の部門に割り当てられた。」(33-5:60-3頁)。

ここに見られるのは、まさに後にフォード・システムと典型化されるメカニズムである。16世紀都市国家ベニスにおける職員が、生涯固定的な分業に従事するかどうかは定かではないが、部門分割を導入することにおいて、作業時間の短縮という分業の効果をねらった体制に組込まれていることが十分に伺える。

同様に、分業の効用を論じる例示は、マンデヴィルの『蜂の寓話』に見ることが出来る。彼は、『諸国民の富』の編者、キャンナンが「編者の序論」において、スミスの「利己心」構想に影響を与えた人物としてつぎのように位置づけられている。キャンナンの言うところを聞いてみよう。すなわち、「アダム・スミスは、ハッチンソンの体系が利己心に充分高い地位を与えなかったということを明らかに信じていた。・・・それにしても、利己心は全経済社会の利益のために作用するという信念をどこからえたのであろうか?・・・かれがそのマンドビル研究によって力をえたということは・・・たしからしく思われる」(73頁)。ここで論じられる「利己心」と分業の関連については、後述するとして、キャンナンは、“division of labor”なる語をスミスが定着させるに当たって、マンデヴィルから由来すると説くのである。少々長文になるが引用してみよう。

「クリヲメニス (Cleo.) ——・・・いったん人間が成文法で統治されるようになると、・・・人間集団は一人のこらずその労働を分割し、細分する (to divide and subdivide their labour) ことを学ばずにはいられなくなるであろう。・・・もし、その一人が弓矢を作ることに専念し、もう一人が食物を調達し、第3の者が小屋を建て、第4の者が衣服を作り、さらに第5の者が器具類を作るというようにすれば、かれらはたがいに有用なものになるばかりでなく、彼等の生業や仕事も、このすべてを5人のおのおのがごたまぜにやるよりも、同じ年数のあいだに、はるか長足の進歩をとげるであろう。

ホラチウス——・・・きみのいうのが真理だということは、時計を製造するばあいになによりもはっきりするのであって、現にそれは、もしこの全部がいまだに一人の仕事としてなされているばあいには到達したであろうよりも、いっそう高い完成の段階に達しており、また柱時計や懐中時計が豊富で、正確で、しかも美し

くできているのさえ、その製造技術が多くの部門に分割されていることに主として起因する、とぼくは確信している。」(Mandeville, *Fable of the Bees*, pt. ii. (1729), dial. vi., p.335, 『諸国民の富』98頁)

この引用の内容を確認すれば、まず、第1に、人間の習性としての「労働の分割細分」が指摘され、次に、仲間の自然発生的な社会的分業が挙げられている。第3には、その分割の時計製造に際しての技術的分業での応用が、豊富で正確な労働成果を保証することを例示している。この2例にみる限り、「労働の分割」が人間の智慧の産物としてかなりの普遍性を持ち、歴史の早い段階から、その効用を発揮させるべく採用されていたと考えられる。したがって、スミスは十分に成熟した「労働の分割」の基盤の上に、「分業」分析を手がけたのが分かる。

また、この例示を承けて、スミスは動詞形の “divide labor” を名詞形の “division of labor” に概念化したと考えるのは容易なことであろう。

3 スミスの分業論

先にも述べたように、スミスの『諸国民の富』記述の冒頭に「分業」が登場する。キャンナンの言葉を借りれば、富裕は分業から生じること、そしてなぜそうなのか、また分業はどのようにして「生産物を増加させる」のか、さらに、なぜ分業は商業の大きさに比例せざるを得ないのか、ということ明らかにする過程で「分業」を出発点に据えたのである。

既に、マンデヴィルの「対話」から推察されるように、分業は一定の効果をもたらすことは周知の事実となっている。したがってここでは、スミスが、分業がなぜ引き起こされるかと考えているところから明らかにしよう。

彼は先ず、文明社会において同胞の仁愛に期待することの徒労を説き、同胞の自愛心を刺激する限りでの「利己心」の重要性を主張する。その利己心を前提として、人々は自己の欲望の充足を図るのであるが、そのためには「同意」「交易」「購買」という互いの媒介行為を必要とする。これら一連の媒介行為は、マンデヴィルの引用にみられる仲間内の職業的分化を必然化し、人々の間に、以下のような「交換」の認識が定着する。すなわち、「自分自身の労働の生産物の余剰部分の中で、自分自身の消費をこえてあまりあるすべてのものを、他の人々の労働の生産物のなかで、自分が必要とするであろうような部分と交換しようという確実性」(120頁)という認識である。この認識の導くところ、人々はそれぞれ特定の仕事について自己の才能または天分を発展させ、完成させるのである(120-1頁)。ここに、スミスにおける「利己心」-「交換」-「分業」の論理経路が明らかになる。

このように人々の分業社会における「性向」が明らかにされてはじめて、分業が「労働の生産諸力における最大の改善」をもたらすことが理解されよう。同時に、労働の諸方面での展開が、「熟練・技巧・判断 (skill, dexterity, judgment)」を発達させるのである。彼は、分業の成果を実証すべく、かの有名な「ピン製造業」の18の別個の作業に分割された作業工程を詳述する。つまり、分業によりあらゆる工芸の労働の生産諸力が比例的に増進されるのみならず、社会における職業分化も進展するのである。かかる分化は、「最高度の産業と文明とを享受している国々でもっとも進んでいる」(102頁)ゆえに、「諸国民の富」に結実するのである。

彼は、分業の結果として、「同一人数の人々がなしうる仕事の量がこのように大増加するのは、三つの異なる事情、すなわち第一に、あらゆる個々の職人の技巧の増進、第二にある種の仕事からもう一つの仕事へ移るばあい

ふつうには失われる時間の節約、そして最後に、労働を促進し、また短縮し、しかも一人で多数人の仕事をなしうるようにするところの、多数の機械の発明、に由来する」(105頁)として、国民の富裕を増進させる分業の効用を語る。ここで注意しなければならないのは、彼が分業の利益を語る時、そこに見られるのは、歴史的経験的事実を認識へと昇華させる先駆者としての立場の表明である。しかし、それ以上に注目すべきなのは、技巧の増進が、「単一の作業への還元」「生涯の仕事への固定化」によりなされることの指摘である。これは、分業が富裕を押し進めながら、そのプロセスにおいて人々に、「仕事の総合性・流動性」を失わせしめる動因ともなりうる側面をも併せ持つことを意味する。かかる分業がもたらす不都合な結果の予見は、次の引用にも明らかである。すなわち、

「分業が進むにつれて、人民大衆の職業は、少数のごく単純な作業に…限定されるようになる。ところで、大部分の人々の理解力は、必然的にかれらの日常の職業によって形成され…もろもろの困難を除去するための便法を発見するのに、自分の理解力を働かせたり、または発明力を働かせる必要がない。それゆえ、彼は自然に、こういう努力を払う習性を失い、およそ創造物として人間がなりさがれるかぎりのばかになり、無知にもなる。…自分が従来しこまれてきた職業以外のどのような職業にも精力的に忍耐強く自分の力を発揮できないようになる」(158-9頁)と。

このように、特定職業での技巧が、人々の知的・社会的および軍事的な美德を犠牲にして、限定的にしか身につけられず、精神的墮落は、政府が防止のための施策を積極的に展開しない限り、必然化することが論じられている。「才能・天分の発達・完成」による「技巧」の定着が、精神的墮落と引き替えに進行することが予見されているのである。

このような産業革命黎明期のスミスの分業

観が、次に産業革命期にどのように受け継がれていくのかを考察してみよう。その代表的論者は、一方は、バベジであり、他は、ユーアである。

4 産業革命期分業論

まず、バベジの分業観から考察するならば、彼は既に、スミスが詳細に分業を分析していることは承知である。その上でまず指摘するのは、分業原理の製造の経済における重要性和普遍性である。すなわち、分業原理の適用は、社会のごく早い段階になされたに違はなく、人々がお互いに職業特化していけば、多くの快適さと便宜を享受しうることが直ちに明らかになったに違いない、と普遍性を語る。しかし、重要性に関しては、以下に見るように、むしろスミスに対立的である。「工場への分業は、社会の総体的な豊かさは、かかるお膳立てによって増進されうるといふ意見の結果ではない。むしろ、このように仕事に従事した個々人が、自分自身、様々な職業に関わるより自己の労働から多くの利潤を獲得しうることを見いだしたという個々人の状況から起こってきたものに違いない。この原理が工場に導入されるに当たっては、社会が相当に進歩していなければならない。なぜなら、もっとも完全な分業の制度が観察されるのは、高度の文明を達成し、さらに言えば、生産者間に大いなる競争が見られる国々においてである」(169)と。工場への分業原理の導入は、政治経済学議論の成果ではなく、工場主間の競争こそ主因である。しかも、分業導入の影響の相対的な重要性については、十分詳細に推定されてきたようには見られないと工場観察から得られた実証分析の成果を強調する。

彼は、しかし、スミスが述べた三つの利益にはそれを認める立場に立ち、さらに付け加える形で、分業に見られる原理を記述する。

1. 習熟に必要な時間について。—技法の修

得において費やされる時間量は、その実行の難易度に依存しており、工程の種類が増せばますますほど、徒弟が修得に必要な時間は増していく。しかし、例えばピンの製造のようにすべての工程を修得する代わりに、特定作業のみに限定されるならば、徒弟修業初期に利益を生み出すことなく費やされた時間の部分は少なくなり、残りのすべての時間は彼の親方にとり利益をもたらすものとなる。もし、親方同志で競争があれば、徒弟は有利な条件を得ることができ、奉公期間も消滅する。また、多くの親からすれば、一つの工程で技能を修得しうること、ならびに子供の生涯の早い時期に利益の源となりうることが、自分の子供を徒弟に仕立てさせるのであり、このことが、労働者数を増し、賃金を低下せしめるのである(170-1)。

2. 習熟過程における材料の浪費を少なくすることにより、生産物の価格を下落させる。
3. 一つの職業から他の職業へ替わるときに失われる時間部分の節約。
4. 道具の交換に要する時間の節約。
5. 同一工程の頻繁な反復に要する技能。同じ工程の常なる反復は必然的に特定の局面での優秀さと迅速性を作業員に生じせしめる。
6. 分業は、工程を進行せしめるために道具や機械の工夫を促す。

バベジによれば、これらが分業から生ずる利益の源泉として通常指摘される事柄である。ところが、製品価格の安さの説明として最も重要で普遍的な原因は全く触れられていないとして、次の原理を提起する。すなわち、

親方は、なされるべき仕事を、それぞれが異なった程度の技能(skill)や力(force)を要する異なった工程に分割することによって、それぞ

れの工程にとって必要なだけの技能と力との適正量を無駄なく購入することができる。ところが、もし仕事全体が一人の職人によってなされるのであれば、その人は、その仕事を分割した場合のもっとも困難な作業をやり遂げるだけの十分な技能ともっとも骨の折れる作業をやり遂げるだけの十分な力とを有していなければならない (175-6: 原文イタリックス)。

バベジは本原理の注記において、この原理は自分自身の数多くの工場の実地調査から得られたものであるが、1815年、ミラノで発刊されたジョージアの『経済学の新展望』(Gioja, *Nuovo Prospetto delle Scienze Economiche*, tom.i.capo iv.) は、明確にこの原理を指摘していることを示唆している。

くわえて、彼は、スミス以上に詳細にピンの製造工程を分析 (176-188) し、作業者が必要とする技能が高ければ高いほど、その工程を他から分離し、全面的に注意を注ぐことの利益は大きくなる。たとえば、「手工製造のピンは、分業の適用でかかるよりも $3\frac{3}{4}$ 倍の原価」(186: 原文イタリックス) がかかっており、分業は、原価低減と労働者への高賃金をもたらすと主張する。

一方、彼は、アメリカ人により発明されたピン製造機械の出現を告げ、こうした機械の人力との比較上の価値を判断するためには、1. こうして作られたピンが起こしやすい欠陥、2. 普通に作られた製品にまさる利点、3. 機械の初期投資費用、4. 修理の場合の経費、5. 機械の運転維持経費の諸点を秤量しなければならないと説く (188-9)。

一方、これに対してバベジの同時代人ユーア (A. Ure) は、その著 (*The Philosophy of Manufactures or an Exposition of the Scientific, Moral, and Commercial Economy of the Factory System of Great Britain*, 1835) で、スミスの分業論について触れ、『諸国民の

富』執筆時には、自動機械は殆ど知られていなかったにも関わらず、「分業」を製造革新の根本原則と見るに至った「不滅の経済学原理」と高く評価する。

かれによれば、スミスの成果は、ピンの製造の例から、分業原理のもと、一定部署での作業の遂行により、手工職人は自らを完成し、より素早くより安価な労働者となり遂げ、適正な有用性と費用の工員が適材適所として配属されていることを示したことである。この適正充当が分業の本質を形成し、有史以来そうあり続けてきた。

しかし、産業革命が進行し、工場制が普遍化した段階においては、こうした適正充当は見られず、労働者の能力の相違は無視され、工程上、特定の技巧と着実性が必要であっても、労働者のもつ不規則性にとって代わられてしまったり、自己統制的で、子供でも指図できるような特定のメカニズムの監督下におかれてしまう。したがって、工場制度の原理は、手工的熟練を機械的科学に代えることであり、職人たちの間での労働の分割や等級化に代えて、作業工程を構成要素に分断してしまうことである (19-20)。

このようなユーアの主張の意味するところは、バベジの言うように、これまでの分業にあっては、労働者間に等級制が見られ、労働者の完成は同時に安価性を意味しはするものの、等級制に基づく適材適所による役割充当が見られた。しかし、工場制の完成は、適正充当に代えての機械的制度の確立以外の何物でもないということである。

ところで、産業革命期分業論であまり関心を寄せられていないが注目すべき論議に、バベジの「精神労働の分業論」がある。彼は著に章を設け(「第20章 精神労働の分業について」)、機械的な作業のみならず、精神的なそれに分業を適用しても同じような成功を収めることができ、同じように時間の節約を確かならしめることを指摘している。

そこで取り上げられている分業例は、フランスの最近制定されたばかりの10進法の採用を促進すべく国家事業として取り組まれた一連の数表の作成事業で、プロニー (M.de Prony)がその任に当たった。彼は作業を3層に分け、第1集団は、5～6人の名だたる数学者からなり、実際の作業には当たらず、なすべき仕事を分析し、全体作業の枠組みを構成し、用いるべき公式を作成する。第2集団は、公式を実際の作業に用いるべく加工し、加減算しか出来ない第3集団に渡すというものであった(194-5)。

バベジは、かかる事業が労働者等級論にかない、第3集団の労働力の安価な購入と全体の時間節約を効用として指摘するのである。そこから彼は、この卓越した計算システムが綿工場あるいは絹織物工場を建設しようとする事業と酷似しているという。事業主は、事業遂行の機会がうまく利用できる見通して、機械の設計図を描く。これは彼の構想の第1部位を構成する。つぎに、彼が設計した機械の運転ができる運転技術者の助けを必要とし、彼ら第2集団は、なされるべき工程の性質を理解していなければならない。機械が建造され、技術者よりは技能程度の低い第3集団の職人が機械の稼働において雇用されねばならない。彼らの仕事及び機械の成績は、第2集団により監督されなければならないのである(195-6)。このような精神的分業は、後にテイラーにより管理制度的に定式化されることは周知のことである。

5 マルクスの分業論

このような分業原理に対する認識は、マルクスに受け継がれ、分業原理は分業にもとづく協業すなわちマニファクチュアにおいて最も顕著に現れると説かれる(第4篇第12章分業とマニファクチュア)。

彼にあってマニファクチュアは、16世紀

中葉から18世紀の最後の3分の1の時期、支配的生産形態として登場し、以後労働過程の存在形態の基本原理をなすものとして捉えられる。まず彼は、マニファクチュアには二重の発生経路があることを明らかにする。その一つは、独立自立的手工業の有機的結合で、客馬車の例のように、既存の種々の種類の自立的手工業の労働者たちが、同じ資本家の下で一個の作業場に結合させられる場合である。当初、自立的初手工業の結合として現象したものが、分割により、狭められ排他的職分に結晶することによりもっとも合目的な形態を受けとるものである。他の一つである継起的マニファクチュアは、スミスの釘製造のように、既存の単純協業において同一または同種の作業をする多数の手工業者の作業が互いに引離され、孤立させられ、空間的に並立させられ、協業に組み込まれることによって生起する(352:563-4頁)。

反面、マニファクチュアは、ガラス工場と熔解坩堝製造工場との結合のように、技術的必然性から労働組織の分業が起こり、工場間の結合から企業間分業として外部化したものにまで発展するのである。

マルクスにおいてもスミスやバベジにより指摘された利益に加えて、世代を異にする労働者の協業が、労働者が共有する技術上のコツを、堆積し伝達するという利点(355:567頁)を指摘する。と同時に、マニファクチュアにおいては、独立手工業や単純協業の場合とまったく異なる労働の連続性、一様性、規則正しさ、秩序、および殊にまた労働強度が生み出される(361-2:575-6頁)のである。他方、マニファクチュア的分業は、社会的全体労働者の質的に相異なる諸器官を単純化しかつ多様化するばかりでなく、量的な規則および比例性を発展させる。かかる労働の等級化固定化は、不熟練労働者階級を生み出すばかりでなく、熟練労働者の修業費の軽減から、労働力の価値の低下がもたらされる

(367:583-4頁)。

一方、社会内分業と作業場内分業の対比にあつては、前者において生産手段の分散と競争に基づく偶然性と恣意性が支配するのに対して、後者では、生産手段の集積と計画性が作用する。

マルクスにおいては、部分労働者たちにたいし、物質的生産過程の精神的諸力能を他人の所有として・また彼等を支配する力として・対立させるということは、マニファクチュア的分業の一産物であつた。この分離過程は、資本家が個々の労働者に対立して社会的労働体の統一と意思とを代表する単純協業において始まり、労働者を不具な部分労働者たらしめるマニファクチュアにおいて発展する。それは、科学を自立的な生産力能として労働から分離して資本に奉仕させる大工業において完成するのである (379:598-9頁)。

6 終わりにかえて

ここに見られるように、分業のもたらすものが、普遍性をもって各論者により論ぜられ、今日の認識に至っていることがわかるが、ここで明らかにされたのは、一つには、分業の普遍性であり、一つには完成が等級への組み込みということであつた。完成することなしには、機械制工業に組み込まれないという過程を知ることが我々の労働過程論を豊富にすることの一端となろう。

<参考文献>

Babbage, C. *On the Economy of Machinery and Manufactures*, 4th ed. enlarged (1835), Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelley Publisher, New York, 1971

Braverman, H. *Labor and Monopoly Capital—The Degradation of Work in the Twentieth Century*, Monthly Review Press, New York, 1974, 富沢賢治訳『労働と独占資本』岩波書店, 1978年

George, Jr., C. S. *The History of Management Thought*, Prentice-Hall, 1968, pp. 33-35, 菅谷重平訳『経営思想史』同文館, 昭和46年, 62-63頁

Marx, K. *Das Kapital*, Bd. I, 1867, 長谷部文雄訳『資本論』, 第1部下, 青木書店, 1954年

Smith, Adam *AN INQUIRY INTO THE NATURE AND CAUSES OF THE WEALTH OF NATIONS*, ed., by E. Cannan, 6th ed., London, 1950, 大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』岩波文庫版

橘 博『工場経営と作業分析』ミネルヴァ書房, 1970年

Ure, A. *The Philosophy of Manufactures or an Exposition of the Scientific, Moral, and Commercial Economy of the Factory System of Great Britain*, London, 1835, Reprints of Economic Classics, Augustus M. Kelly, 1967

Wren, D. A. *The Evolution of Management Thought*, 2nd. ed. John Wiley & Sons, New York, 1979, 車戸實監訳『現代経営管理思想—その進化の系譜』マグロウヒルブック, 昭和57年